

## コンサルテーション事業報告

**事業名** 重複障害児・者コミュニケーション支援

**事業代表者** 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

**対 象** 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

**目 的** 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲のあり方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

**主なスタッフ** 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：笹原未来・岡野 智・野崎義和・新谷千尋・  
新村享子・杉山 章  
東北大学教育学部：安部亜樹子・佐藤多恵・陳 麗華

### 実施内容

#### (1) 教育相談として対応している事例（6事例）

6事例は、弱視ろう（盲学校高等部）、脳性まひ（養護学校高等部及び小学部）、アンジェルマン症候群（養護学校中学部）、レット症候群（障害者通所施設、幼児通所施設）の診断を受けている。各々月に1度位の割合で保護者と共に来談しており、研究室やプレイルーム等で対応している。弱視ろう児に関しては、生活行動やコミュニケーションの内容の拡がり、脳性まひ児2名とアンジェルマン症候群児は、コミュニケーション手段の拡がりが主な目標である。レット症候群の2例は、移動行動時の様子から如何に意思を読みとり対応するかが大きな課題である。6事例のうち1例についてはAACと支援機器に関する研究報告書において取り組み経過を報告した（川住他，2008）。

#### (2) 仙台市発達相談支援センターとの連携で対応している事例（1事例）

仙台市発達相談支援センターでは、重症心身障害児・者へのコミュニケーション支援事業を行っている。本研究室では、この事業と連携・協力することを通して、在宅重症心身障害者へのコミュニケーション支援を図りたいと考えている。本年は、これまで継続して支援を行ってきた1事例について、医療的ケア場面でのコミュニケーションの課題に取り組み、日本特殊教育学会年次大会において経過を発表した（笹原・川住，2008）。

### (3) 病院・施設に長期入院中の事例（7事例）

われわれはこれまで、国立病院重症心身障害児病棟に入院していて、発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人5名に対し、当事者間相互のコミュニケーション支援を1～2ヶ月に1度の割合で実施してきた。本年度はこのうちの2名について、パソコン操作による文字でのコミュニケーション支援（文字習得・単語構成・短文作成・話題伝達の促進）を実施した（安部，2009）。また、保護者と看護スタッフの要望を踏まえ、ウェルドニッヒ・ホフマン病児へのコミュニケーション支援（コミュニケーション意欲の促進・支援機器操作・文字学習ソフトの導入）を開始した。さらに重症心身障害児施設に長期入所中の子どもを対象に、語りかけ場面におけるコミュニケーション行動に着目した取り組みを開始し、これまでの経過をまとめた（新谷，2009）。

### (4) 学会報告等

川住隆一・竹島久志（2008）脳性まひを伴う青年とのコミュニケーションと生活行動を拡げる活動支援．楽暮プロジェクト活動報告書，Vol.1，37-42.

笹原未来・川住隆一（2008）医療的ケア場面における重度・重複障害者とのコミュニケーションに関する研究，日本特殊教育学会第46回大会発表論文集，564.

新谷千尋（2009）語りかけ場面における視覚障害を伴う重症心身障害児（者）の聴性行動に関する研究．平成20年度東北大学大学院教育学研究科課題研究論文.

安部亜樹子（2009）重度肢体不自由者に対するひらがな学習支援の試み—スイッチワークと単語構成学習支援ソフトを使用して．平成20年度東北大学教育学部卒業論文.